ドロドロとフワフワ（「風と共に去りぬ」から考える）

karinomaki

はじめに

心の偽善というものを、ドロドロと判断しすぎると、この世は地獄になります。しかし、「自分」は、そして、人もまた悪いのだと思っていることを前提にして生きると、この世界ははるかに生きやすくなります。

しかし、自分をきれいだと思っていることほど間違ったことはないのです。それがどうしてか「風と共に去りぬ」という小説から検証してみたいと思います。

悪い女

マーガレット・ミッチェル作の、「風と共に去りぬ」という小説をご存知ですか？この小説は、「悪い女」である、スカーレット・オハラがヒロインです。スカーレットは、善良な妻であるメラニーという女性の夫アシュレにに横恋慕し続けますが、最後に、自分と同じ要素を持つ、「悪い男」レット・バトラーへの真実の愛に気がつくというものです。（ネタバレになるので、今のところは結末は書きません。）

私は、このスカーレットという、悪い女を嫌いになれませんでした。スカーレットは時に自分の悪さに恐れ、自分は地獄に落ちるのではないかと恐れますが、すぐに、「明日考えよう」と、切りかえてしまいます。スカーレットは心が美しくありません。平気で人の手紙を盗み読みするし、心の中は悪口雑言でドロドロです。しかし、私がスカーレットを嫌いになれないのは、彼女が自分の悪さを知りぬいているからなのです。

偽善とは

この話について検証する前に、「偽善」について少し書きたいと思います。先ほど、「ドロドロとフワフワ」という表現を使いました。ドロドロは悪、フワフワは偽善なのです。誰しも自分を悪いと思うことほど痛いことはありません。全ての不幸が全てまわりのせいで、自分はいい人間だと思うとどんなに楽でしょう。しかし、それは、とことんまで考えぬいて、自分の悪さを破壊して初めてできることで、並たいていのことではできません。それを書こうと奮闘した小説が「風と共に去りぬ」だと思うのですが、これは、徹底的に悪い女をヒロインにすることでできていることなのです。
一方、フワフワは偽善です。考えるということをあまりしていないと、あるいは、大きな不幸にあったことがないと、人はこの安楽の上に乗り、自分の悪さが見えません。苦しくてもがいて初めて自分の奥底の地獄が見えるのです。それが見えていたスカーレットの心の苦しみが、「風と共に去りぬ」にはたくさん描かれています。

現実に向かうために

世の中には、自分を悪いと思っている人と、いい人間と思って疑わない人に分かれます。私が生きにくいと思っていたとき、世の中の人はほとんどが後者であると思った時でした。しかし、ある時、風と共に去りぬを思い出しました。私は、昔、スカーレットの、「明日考えよう」という言葉に支えられて生きていたことがあるのです。それは、現実から背を向けて生きていた時でした。

私は、生きていることがつらかった。しかし、生きたかった。自分が悪いと思うことも、まわりが悪いと思うこともできなかった。現実に背をむけることの言訳として、スカーレットの生き方を、考え方を心の支えにしていたのです。私は、偽善こそがドロドロに感じる人間でいたいのです。最後には現実に向き合いたい、そのために。その理由を「風と共に去りぬ」のラストを書くことによって書きます。

風と共に去りぬ

ドロドロした心、そして、フワフワした幸せ、どちらを選ぶかというと、私はドロドロを選びます。スカーレットのような、悪い女になるのではなく、ドロドロと向き合い、自分で固める生き方を私はしたいです。もし、自分の醜さが全く見えないとしたら、こんなに幸せなことはありません。その人はフワフワした幸せな人生をおくれると思います。しかし、私は、逃げよう逃げようとして沼でもがく、スカーレットを、美しいと思ったのです。ネタバレをすると、悪い男レット・バトラーは最後はスカーレットに愛想をつかして出ていきます。しかし、スカーレットは自分の悪さを浄めるために、うまれ故郷に帰るのです。その時のスカーレットの心は限りなく美しいのです。

ドロドロとフワフワ

私もまた、逃げずに自分の悪さと向き合い、美しくなりたいです。フワフワしたものの上にいては、この世界の美しさは味わえないから。自分をきれいだと思うことは偽善だと思うのです。それができず、苦しむ人間の心を、私は何より美しいと思います。私はフワフワした幸せより、泥くさい生き方が好きです。（この言葉は私の大切な友人の言葉でもあります。）スカーレット・オハラの生まれ故郷、タラのような故郷を、私も心に持っています。